

「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会広報室
Mail : nishikouarigatou@gmail.com
#ありがとう西高

Instagram : nishikouarigatou
twitter : @nishiko_arigato
ブログ : <https://thanksomiyawest.blogspot.com/>

校舎の歴史を振り返る

西高生の思い出が詰まった校舎は、閉校を迎えた後に取り壊される。本特集では取り壊しを前に、校舎それ自体の変遷を振り返る。なお、来年3月中旬に「ホームカミングウィーク（仮称）」が実施される予定。卒業生が校舎に立ち入る機会はそれが最後となりそうだ。卒業生の皆さんはぜひスケジュールの確認を。

学校要覧に残された、校舎内の変遷

創立5年を迎えた1966（昭和41）年、西高は現在の敷地へ移転した。当初の校舎は古い木造建築で、ネズミが顔を覗かせることもあったという。1971（昭和46）年に一部完成した北校舎西側（現存）には、木造校舎になかった理科の各実験教室や被服室、調理室などの特別教室や図書室などが設置された。続いて翌1972（昭和47）年には北校舎の東側が完成。こちらは普通教室が並んでいる。

この頃の学校要覧を見てみると、非常に興味深い。当時、北校舎に現在しない2つの教室があった。一つは2階の自販機やベンチがあるスペース。もう一つは3階の、渡り廊下と新聞部の部室があるスペースが、昔は教室だったのだ。この2つの「幻の教室」は、南校舎の完成に伴い校舎間を結ぶ渡り廊下が作られたため、取り壊された。同時に木造校舎はその役割を終えたことで1975（昭和50）年に解体された。敷地移転から10年かけて大宮西高校の現存する校舎群が完成した。

今月号の「あの場所は、今」では普通教室

を取り上げているが、西高生にとって3年間の普通教室にはどのような思い出があるだろうか。4月のクラス替えは、クラスメイト、担任の先生は誰かとドキドキしながら迎えた人がほとんどだろう。記者もその一人だった。クラスが判明すると、今度は教室がどの場所かで一喜一憂したものだ。2階の自動販売機までの距離、学食から近い教室、反対に「陸の孤島」と呼ばれた一番端の教室など様々。しかしその思い出は、ある年を境に大きく変わることになる。

平成18（2006）年に教室配置がガラリと変わっている。平成17年度までは1年生の教室が主に1階で、上級生になるにつれて上の階に移っていた。しかし翌年以降は1年生の教室が主に4階、学年を経るとともに下の階へと移動する形になった。記者の在学当時は3年生が下の階だった。4限終了と同時に学食には上級生が殺到し、下級生は先輩を押しつけて昼食を調達せざるを得なかったことも、またいい思い出であった。



2019年8月撮影、夏休み期間のため荷物は少なめ

あの場所は、今 -普通教室編-

取材の一環で、教室を見せてもらう機会があった。机や床も一見昔のままで、懐かしい教室に見えたが、すぐ違和感に襲われた。

まず変わったなと思ったのは、エアコンが付いたことだ。夏の授業と言え、カーテンを時折揺らす涼しい風が待ち遠しくて、遠い樹々が揺れないかずっと外を眺めていた。その思い出の窓も、耐震補強の筋交い通ってかなり雰囲気が変わった。さらに目についたのが、教室前方に追加された無線LANのルータらしきものや、電源コンセントだ。様々な電子機器が授業で活用されるようになったからか、いくつも追加されたケーブルを納めて壁に這ってゆく配線モールを目で追うと、先は壁の中に消えていた。もしかしたら壁や天井の中は大改造されているのかもしれないと思うと、見慣れたはずの校舎全体が、疎遠になってしまった旧友のように感じられた。

そうして勝手に寂しい気分になっていると、窓際に懐かしいものを見つけた。黒いスポンジでできた袋状のものが、裏返しに干されてあった。黒板消しクリーナーのフィルターである。在学時いつの間にか専属の係になっていた記者も、洗ったあと同じ場所に同じようにしていたのを思い出した。長く付き合った本体も黒板近くで記憶にあるままの黄緑色をしていた。そうか、君はずっとここにいたのか。思わず声をかけると、他人行儀に感じられた校舎の空気が急に昔のそれに戻ってゆくを感じた。教室も記者自身も昔のままではないが、ずっと変わらないものも確かにあった。

(石川)

「アイデア出し」会議、次回10月予定

7月21日（日）、大宮西高校にて「ありがとう西高！」実行委員会主催のもと「大宮西高閉校関連イベント企画アイデア出しワーク



10代から50代まで、多様な世代が出席した

ショップ」が行われた。当日は卒業生を中心に約20名が参加。参加者には元PTA役員の姿もあった。ワークショップではブレインストーミング方式を用いながら、多様な施策アイデアが出されていった。アイデアがどのように閉校イベントで使われるか、今から期待される。次回のアイデア出しワークショップは10月頃を計画している。

大宮西高

自分の色を出せる西高に育てられた

瀬畑 茉有子さん（ファッションモデル）

彼女は満面の笑顔で迎え入れてくれた。都内の自宅で取材を受けてくれた彼女は、ラフな装いであったが、圧倒的なオーラを纏っていた。長身、小顔、はっきりとした目鼻立ち。まさにスーパーモデル。2004年のミス・ユニバーズ準グランプリに始まり、近年はNIKEの世界キャンペーンなど、世界に活動の域を広げている瀬畑さん。西高時代の思い出とともに、現在の活躍へとつながる道程を聞いた。



自然光を当てたほうがいいね、と自ら窓際に立ってくれた瀬畑さん。

からは「まゆげ」と呼ばれ親しまれていたらしい。印象的な眉毛は、今でも彼女のトレードマークとなっている。

西高ではまだダンス部が創設される前の時代だが、ダンスユニット「TOW US」という4人グループを自ら創り、文化祭ステージで活躍していたそうだ。

してくれた。「自分の色を出せるという余裕がある雰囲気が好きだった」と振り返る。自分を表現できると、もっとトレンドが知りたくなる。ファッションに対する熱が加速度的に高まった3年間だった。

「おしゃれがしたい女子高生の気持ちを汲んでくれる学校だった。女子パワーが圧倒的だったけど男子も先生も、皆がハッピーだった気がする」と瀬畑さんは語る。

夏服で選んだ 大宮西高

「西高時代の話、いろいろ忘れちゃって思い出せないんですね……」と最初は不安そうにしていた瀬畑さんだったが、記者とカメラマンが同期生だったこともあり、共通の友人など当時の思い出話をしているうちに、いろいろと記憶が呼び覚まされてきたようだった。場が暖まってきたところで、はじめに、西高を選んだ理由を聞いてみた。

「なんと言っても夏服。スカートが可愛かったから（西高にした）」と即答だった。

部活動は特に入っておらず、放課後はバイトに精を出していた瀬畑さん。バイトが無い日は、学校の向かいにあった（当時）仙台屋でおだんごを買い、昇降口の階段付近で、友達とたむろするのが日常だった。当時の友人

カスタムで目覚めた ファッションへの道

瀬畑さんがモデルとしてデビューしたのは19歳、在学中はまだ一般人であった。しかし、ファッションの世界に対する興味を持ったのは西高在学中のことだった。きっかけには、西高の制服、そして西高自体の気風が大きく関わってくる。

瀬畑さんは当時の西高について「フレキシブルな対応をしてくれる先生が多かった」と表現する。制服や頭髪をアレンジしても、「頭髪チェックの日」にスプレー染めしてくれば黙認でスルーしてくれる、寛容な雰囲気があった。制服も、個人的なカスタムを黙認

ファッション学校 そしてモデルへ

西高卒業後、ファッション専門学校である文化服装学院に進学。スタイリスト科を専攻した。カスタムやメイク、コーディネートに興味を持っていて「人をきれいにしてあげる仕事に興味があった」と振り返る。

そんな瀬畑さんに、思いがけない出会いが訪れる。課外授業で原宿の現地調査をしているとき、突然のスカウトを受ける。当時、ミス・ユニバーズ・ジャパンを主宰していたイネス氏との出会いだった。（後編に続く）